

『食と農の社会学－生命と地域の視点から－』

梶淵俊子・谷口吉光・立川雅司 編著

農業・農村領域 研究員 大橋めぐみ



『食と農の社会学－生命と地域の視点から－』
著者／梶淵俊子 谷口吉光
立川雅司 編著
出版社／ミネルヴァ書房
出版日／2014年5月

本書は、19名の社会学を中心とする研究者・実践者によって執筆されています。あとがきに「『食と農の社会学』と銘打ったおそらく国内最初のテキスト」と述べられているように、多彩で包括的な内容、キーワードや論点の提示、多くの文献の紹介など、教科書的な活用も考慮して編集されています。私は社会学が専門ではないのですが、興味深いテーマが多く、社会学以外の分野の方にも、とても読みやすいと思いますので、ご紹介したいと思います。

はじめに、食と農の社会学のテーマとして、「生産者と消費者、農村と都市との分断、地理的、社会的、心理的距離の拡大といった、現代の食と農をめぐる問題」があげられます。そして、これらの問題には、「近代産業社会のシステムが抱える諸矛盾（グローバル化、環境問題、経済格差など）がきわめて鮮明に凝縮された形であらわれている」ため、経済的観点からだけでは十分説明できない側面を社会的に分析する必要があると述べられています。この「社会的な分析」については、序章において、歴史的観点、文化的観点、構造的観点、批判的観点という4つの視点が提示され、食と農の社会学は、「食と農をめぐる諸現象に対して、歴史、文化、構造（社会構造や制度など）による影響やこれらとの相互作用を考慮しつつ、批判的に捉え直そうとする研究領域」といえると定義されています。また、具体的に、「農業・食料社会学」の主要な研究テーマとして、(1)グローバリゼーションや多国籍企業がもたらす農業・農村システムの変化、(2)新たな農業技術がもたらす影響と社会的葛藤、(3)代替的食料ネットワークの形成、(4)特定の農産物、社会的構築ないし商品連鎖の変化、(5)規格や基準によるサプライチェーンの再編、があげられています。

本書の構成は、以下のようになっています。序章では、アメリカや欧州、日本の研究レビューが行われています。第I部（第1～3章）では、多国籍アグリビジネスによる寡占状況やその課題、こうしたグローバリゼーションに対する対抗軸として、地域

やそこでの暮らしとつながりを、地域ブランドや真正性という対抗的戦略から再構築する取り組みが論じられています。第II部（第4～7章）では、近代化、産業化に対する対抗軸として、農薬、畜

産、生ごみなどの事例に対し、環境や持続性、生命・循環という視点をどのように地域内で再構築するかが論じられています。第III部（第8～12章）では、対抗性を担う主体とその実践、これを支える理念について、中山間地域や農の営み、女性、交流の場に着目することで、豊かな意味空間や新たな関係性の可能性について論じられています。そして、終章では、消費者の選択の重要性が指摘されます。人間の食行動に対する意識には、内向きの身体に向かう方向と、外向きの自然・社会環境に向かう方向があり、日本では、安全性や健康などの内向きのシンボルへの関心が高い一方で、倫理につながるシンボルが普及していないという課題が指摘され、倫理的食行動を促す方向性が議論されます。

各章の詳細を述べることはできませんが、例えば、代替的食料ネットワークの形成というテーマでは、第3章では、地理的表示制度により比較的大規模な農家が経済効果を得ている一方で、小規模な農家は、むしろ農場直売などを行っており、消費者との近接性による真正性があることが指摘されています。また、第8章では、アメリカにおいて、当初、近代農業に対抗するものであった有機農業が、アグリビジネスに再編された「ピック・オーガニック」となった状況を打開するため、ローカルやコミュニティを再評価する動きが出てきたことが示されています。歴史的、構造的、文化的観点といった分析の視点に注目して読み進めていくと、社会学の方法論を学ぶ点からも、非常に興味深く感じました。関心のある分野について、ぜひ、一読をおすすめします。